

グルジアにおけるムスリム

——パンキシ渓谷のキスティ人を事例に——

平成 26 年入学
派遣先国：グルジア
山田 奈緒美

キーワード：旧ソ連地域，宗教マイノリティー，イスラーム復興，難民教育支援，アグロツーリズム

対象とする問題の概要



（↑ナリカラ要塞からのトビリシの眺め）

パンキシ渓谷の問題は、当地の住民の意志に起因するものではなく、むしろロシアとグルジアという対立する二国家間の外交上の駆け引きの結果であるという点で、前者の紛争とは区別されるだろう。

グルジアは、コーカサス山脈の南麓、黒海の東の沿岸に位置する、旧ソ連構成国の一つである。人口 450 万人足らずの小国であるが、言語と宗教に基づいた独自の文化を背景として民族主義が高まり、ソ連の崩壊を待たずに独立を果たした。しかし独立後、強硬な民族主義政策は、国内の民族マイノリティーの反発を受け、情勢の不安定化を招いた。アブハジアと南オセチアでは紛争に発展し、現在に至るまでグルジア政府の主権が及んでいない。また、キスティ人ムスリムが多く住むグルジア東部のパンキシ渓谷は、チェチェン紛争の混乱が収まらない時期に武装勢力潜伏の疑いをかけられてロシアによる空爆攻撃を受けた。パン

研究目的

パンキシ渓谷においては、2002 年から 2003 年にかけてグルジア政府が武装勢力掃討作戦を行った甲斐もあり、以後治安は回復していった。しかし、紛争の混乱時に世界中のメディアから貼られた「ムスリムテロリストの巣窟」というレッテルは、未だに払拭し切れていない感がある。本研究では、パンキシ渓谷に住む人々の歴史、及び現状を明らかにするとともに、彼らが今どのようにして地域の再活性化を図ろうとしているのかを考察することを目的とする。そのために、文献によって同地域の歴史や同地域を取り巻く国際関係を整理するだけでなく、現地の人々の語りを聞くことによって彼らが自分たちの地域のあり方をどのように受け止めているのかを分析していきたい。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークは、2014 年 9 月 1 日から 11 月 6 日までの約 2 ヶ月余りに亘って行われた。最初の 1 ヶ月半と最後の 1 週間は、グルジアの首都トビリシに滞在し、主に語学学校にてグルジア語の



しかし、その強固なグルジア正教アイデンティティーが、他宗教、特にイスラームに対する非寛容さや偏見に繋がっている感は否めなかった。私がパンキシ渓谷に行くと言うと、「ムスリムがいるから危険だ」と真顔で忠告する人もあったくらいである。

(↓6世紀創建のアンチスハティ教会内)



パンキシ渓谷は、そのようなグルジア人たちの評価やネット上の憶測とは反対に、呑気な家畜の鳴き声と穏やかな川のせせらぎが耳に心地よい、平和な田舎であった。「金が無い」とこぼしながら無聊をかこつ人々もいたが、その顔は基本的に明るかった。

(牛もののびのび散歩。のどかなパンキシ渓谷→)そして、外部から貼られた「テロリストの潜伏する危険地帯」というレッテルを、自分たち自身で情報を発信することによって克服していこうとする姿勢がうかがわれた。例えば、2つの教育支

個別指導の授業を受講した。間の2週間は東部のカヘティ地方パンキシ渓谷に拠点を移し、同地でのフィールドワークを実施した。

グルジアの民族主義の基盤になっている重要な要素として、グルジア正教がある。トビリシ滞在中、教会が視界に入るたびに十字を切っているグルジア人を少なからず目撃し、彼らのアイデンティティーにおける宗教の存在感の大きさを実感した。

(←トビリシのホストファミリー。仲良し母娘)



(↑南コーカサスー巨大なツミンダサメバ大聖堂)



援 NGO が英語とコンピューターの授業を開講していたが、次世代はその 2 つのツールを活かして世界に向けてメッセージを伝えていけるであろう。また、いくつかゲストハウスがあり、ウェブサイトを作ってアグロツーリズムの促進を図っていたことから、外部の人たちに自分たちの地域の魅力を知ってもらおうとする活動が今後ますます盛んになると思われる。



（左：パンキシ渓谷にて。グルジア名物チュルチヘラჭურჭელა作り。一年に一度の女性の体力仕事。糸で一つ一つにつないだクルミを、小麦粉を混ぜて煮たブドウ果汁にひたし、天日干しする。外側のグミのような独特の触感と中のクルミの香ばしきのギャップがたまらない）
（右：パンキシ渓谷ドゥイシ村のやんちゃな男の子たち。小ぶりの栗と非常に苦いドングリらしきものをくれた）

今後の展開・反省点

パンキシ渓谷は、紛争に伴う混乱から立ち直りつつあり、自分たちで情報を発信していくことで、社会的な孤立状態を脱け出ようとしている。しかし一方で、チェチェン人の流入によってもたらされた新しいイスラーム、いわゆる「ワッハービズム」は、主にキスティ人の若い世代を中心に信者を増やしつつあり、それを快く思わない年配の世代との間でギャップを生んでいる。また、かつて行われていたキスティ人ムスリムとグルジア人正教徒の共同礼拝も消滅し、宗教間ギャップも広がりつつあることがうかがわれた。そんな中、イスラーム国の軍事司令官がパンキシ渓谷の出身だという事実が発覚し、世界のメディアは再びこの地域に「テロリストの巣窟」という負のレッテルを貼りつけようとしている。今後は、パンキシ渓谷における「ワッハービズム」の隆盛とそれによる住民に対する影響、及び他のイスラーム地域情勢との関係を、時間軸に幅を持たせて考察していきたい。

（ドゥイシ村の「ニュー・モスク」→）

